途上

―創造に於ける人間の自然　覚え書き―

松　下　昌　義

左京キリスト教会

はじめに

この小冊子に収めた文章は、それぞれの主題の序文にもあるように、左京教会週報や夏季集会用テキストなどに記したものです。

考えてみると、このように記した文章は尾籠な言い方をすれば、一人の人間が生きて行く途上で出したくそのようなものだと思います。

従って、これは私が生きて、私なりに貧しくとも、その時や場に自己を埋没しないで生きようとして何かを考えたという確証になっても、そこで考えたことがらに私自身とらわれてはならず、大切なことは、現在も尚主体的に生きるために私がどのような生の営みを為しているかということにあるのだと思います。そして、今そのことにみづから関心をもちたいと思っています。

この小冊子を読んで下さる方は、そのつもりで眼を通していただければと願っています。皆様のご批判をいただければ、それを今後の私の歩みの助けにさせていただきます。

尚、この本は先に出版しました〝途上―私の信仰批判の歩み―〟の姉妹編として、タイトルを〝続途上〟としました。

昭和四十九年二月

松下昌義

目次

一、「創造に於ける人間の自然」覚え書き……五頁
一、宗教化現象……四三頁
一、イスカリオテのユダとイエス……一一三頁

「創造に於ける人間の自然」覚え書き

序

この「創造に於ける人間の自然」という文章は、昭和四十七年七月から四十八年三月迄の左京教会週報誌上に発表したものをまとめたものです。

当時、私は途上一号に於て発表した通りの信仰の反省をして来たのですが、その反省を私なりにまとめてみる必要を感じて記したものです。

しかし、まとめ出してみると、その細部に於て私自身の能力に於て不足な面が多く出て来て、結局、覚え書き程度にならざるを得ませんでした。その意味で本当のまとめは私の今後の課題として残されることになりました。

それにしても、これも又私の人生の途上の一こまのことがらとして未熟なままで自分をさらけ出しておくことは、私自身に対する私自身の歩みの記念碑となるのではないかと自己満足している次第です。

昭和四十九年二月

松下昌義

「創造に於ける人間の自然」　覚え書き

一

聖書は人間を世界とともに神の所造と説いています。しかし、それは世界や人間についての「起原」にかんする説明ではなくて、さまざまのものやことがらとの関わりのうちに生きる人間が、自と考えるであろう自己の存在や世界の存在についての「根拠」に関する宗教的な信仰告白なのであります。（ヘルブ書11・3）　そして、その告白の形式は、謂所神話的であります。

さて、世界や人間が神の所造であるという信仰による告白は、世界や人間が偶然的な存在ではない、ということであり、他方に於ては、世界や人間は、そう在ることが自然であるという定めのもとにあらしめられているという告白であります。

聖書は、神の所造にかかわるもののうち人間を特に「神のかたち」に創造されたものであると告白しています。この「神のかたち」とは人間以外の他のものにないそれのことであります。では、ないそれとは何なのかと申しますと、神による被造者としての自己を弁え得るほどの知と情と意の働きを為し得るそれであるということです。即ち、知によって代表されるそれらは可能的無限性（テイリッヒ）を志向する能力を秘めつつも、その有限性を弁えている知性・情性・意志であるということです。人間とはこのような能力をもった存在として在らしめられ、定められていることが「神のかたちに創造された」（創世記1-27）ということです。

次に、人間の存在のしかたとして「人がひとりでいるのはよくない、彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」（創世記2・18）とある如く、他人との関わりに於ける存在として定められているということです。即ち、知・情・意という能力の働きは被造物としての自己認識ー神による被造者としての自己を弁え知るーのみに止まらず、他人との相互扶助の関わりに於て行使すべきものとして創造に於て定められているのです。このようにして

人間は他者との関わりの中に存在するものとして在らしめられているのであります。ですから、今述べたことを次のように言うことができます。

人間の存在は「わたし」という個人が、それ自身単独で存在しているのではなく「あなた」と呼ばれる他人との関わりの中で「わたし」として存在しているのであり、しかも「わたし」が「あなた」との関わりの中で共に存在し得るのは、「わたし」と「あなた」との関わりを関わりたらしめるように定められた創造に於ける定めによるのであり、更に、その定めを弁えある豊かな関わりへと生み、保つために知・情・意という可能的無限性を秘めつつも、その有限性を弁えているそれを行使して生きるべく定められているものが人間であるということです。従って、「わたし」は何如なる意味に於ても「あなた」を「わたし」のもとで統一し、抱束するようなことはあってはならないし、「あなた」の中に「わたし」を埋没し解消することもあってはならないのです。

以上に於て、創造に於ける人間の定めの概要を述べたのですが、今一つ人間以外の所造にかかわる世界、つまり、動植物を含めた自然物と人間との関わりが語られなければなり

ません。

聖書は、「地を従はせよ。……地に動く生きもののすべて治めよ」（創世記1・28）と人間にそれらの支配がゆだねられたと語っています。しかし、それは、人間が自分の好みに応じて自由に一方的にそれらを利用し、統一してよいということではなく、「共に存在し得るため」に「従はせよ」「治めよ」ということであります。

二

創世記によりますと人間は、自然の支配を神からゆだねられた存在として語られています。即ち、「産めよ、ふえよ、地にみちよ。海の魚・空の鳥・家畜とすべての獣・地の表を這うもの・彼らを治め支配せよ」（創世記1・28）。しかし、それは人間が自然との関わりに於て果すべき責任について語られているのです。即ち、自然を自然のままに在らしめ、

保たしめるという責任なのです。その理由は、自然が自然のままに在ることが、人間も創造に於ける定めに生き得ることに必然的に連らなるからであります。

自然の自然なる在り方の破壊、即ち「わたし」という人間による統一支配は必然的に人間の生の破壊に連らなるのです。このことは、人間にとって自然は決して従属的、且つ対立物としてあるのではなく「共に在る」ものだということであります。

「共に在る」ということは、自然も人間と同じ神の被造物であり、被造物として相互に関わり、運命共同体的な「場」を形成せしめられて「共に在る」べく創造に於て定められているということであります。

以上のように、人間が人間と関わり、また自然と「共に在る」ことが、とりもなほさず創造に於ける人間の自然・定めであり、そこにエデンの園、即ち、幸いがあり、幸いの「場」が保たれることになるのであります。

故に神は、人間と人間、自然と自然、人間と自然との全体的な関わりの「場」を創造された後、「造ったすべてのものを見られたところ、それは、はなはだ良かった」と満足さ

れたと創世記は記しているのです。

しかるに、アダムとエバ則ち人間は、その創造に於ける人間の定め、自然を自からの知・情・意によって破壊し、自己自身のみならず自然をも不自然なものに陥しいれ、その結果エデンの園の喪失、即ち失楽園となるのであります。（創世記3・23～24）

人間は他の被造物と異なり、ものごとを探求する知恵、即ち理性と聖なるもの美しいものを理解し求める感情、即ち感性と自から主体的に選択し決断をなし行為する自由なる意志をもっていますが、これらは謂うなれば、人間に与えられゆるされた自然的自己肯定の定めであって、さまざまの文化・技術・哲学・宗教・芸術などが、それによって生み出されて来るのであります。

しかるに、持てる知・情・意の自然的自己肯定の域を越えて、并えなく自己の可能的無限性を志向し「わたし」という主観性によって「あなた」も「他のすべの自然をも」統一しようとすることにより、ついに破壊的自己高場へと自からを堕落してしまったのです。それ、ちょうど、全体の平和のために用うべきものとして与えられた武器を、自己の独裁の

ため兇器として悪用することにより、武器の賦与者や全体の信頼を裏切ることで全体のみならず自己自身をも破滅するものになったのに似ています。

聖書は、人間が神の定めに逆い、へびの誘惑に負け、自己の有限性、被造物性についての自覚えのしるしであった「園の中央にある木の実」を食べた時「アダムとエバの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合せて腰に巻いた」（創世記3・7）と記していますが、それは、性によって象徴される人間の自己中心性・利己性、「わたし」による他者統一性への堕落であり、さらに、それにもかかわらず相互にその思いを自からの内に秘め隠し被おうとする関係の存在となってしまったことを意味しているのです。これは、「共に在る」ことによってのみ人間として幸いの「場」を現成せしめることが出来る創造に於ける人間の定め・自然からの逸脱にほかなりません。

三

被造物は、どれ一つとしてそれ自身単独に存在することは出来ず、自然と自然、人間と人間、人間と自然とが相互の関わりに於て現成する「場」に於て相互依存的・相互扶助的に存在するのです。

そして、現成する「場」は自然や人間が創造に於ける定めを弁えている――創造の根拠に立っている―場合にのみ安定した本来的な「場」が現成し得るのであって、創造の定め――根拠――から逸脱するとき本来的かつ安定した「場」は喪失し、不自然で非本来的不安定な「場」に転化してしまうのです。

従って、本来的かつ安定した「場」の現成者は自然や人間それ自体でなく、自然や人間を関わりへと導き結ぶ自然や人間の根拠なのであります。

そして、その根拠とは人間や自然の安定した在り方を在り方たらしめている定め、即ち相互の関わりの中でのみ安定した存在が出来得、且つそのようにあることが、そのものの

自然であり得るように定めた創造に於ける自然そのもののことを言うのです。

例えば、人間は男と女との関わりに於て、その子孫を産み出し得るように定められ又隣人との関わりに於て存在の安定を得、且つその知・情・意を正しく弁えをもって行使出来得るように定められています。更にその関わりに於て社会という「場」が現成し、関わりの運動のなかに「時間」が現成し、その「場」や「時間」と共に、ないしは「場」や「時間」を現成しつつ「神のかたち」として創造された者としての使命を正しく歴史的にはたし得るようになるのです。

故に、単に人間の集合が必然的に「場」を現成するのでなく、ましてや「場」や「時間」がすでにあって、その「場」や「時間」に人間があつかるのでもなく、人間が創造に於ける定めにふさわしく存在しつづけることによって、安定した「場」や「時間」が同時的に現成するのであります。更に、その安定した「場」や「時間」に於てのみ人間は人間と成り、正しく創造活動がなし得るのであります。

四

人間は、「わたし」または「あなた」として相互の関わりのなかで生きるように創造に於て定められています。つまり、人間は本質的に人間的存在であります。

この人間性の内実は「愛」であり、その「愛」が、ひとを人間へと転化せしめるのであります。即ち、聖書が「土のちりで造られた」人間が「命の息をそのうちに吹きいれられ」ることにより「生きた者」となったと言っていることの意味です。（創世記2・7）

したがって、人間性とは愛をもって相互に助け、助けられつつ関わる人間の本質的な実存性なのであります。

このような人間相互の連帯に於て生きる共同の生の姿を聖書は、「それで人は、その父と母とを離れて、妻と結び合い一体となる」といい、また、「ふたりとも裸であったが恥ずかしいとは思はなかった」（創世記2・24～25）と言っております。

以上のような創造に於ける人間の定めが創造に於ける人間の自然なのであり、その生の

現実に於て人間の安定した場と時間が自づと現成するのであります。そして、この現成した安定の場又は時間をイエスは「神の支配」または「神の国」と申されたのであります。そして、ここにのみ人間の実存があり、「神に生きる」人間実存の姿があります。故に、この人間の実存は人間の一切の観念の営みに先行してある人間の根源的定めであり自然であると申せます。

イエスの生涯と十字架の現実は、この人間実存、即ち創造に於ける人間の自然の最も具体的、且つ最も素直なる啓示であったのです。

さらに、人間の知・情・意は本来この人間性の創造的な役割をになっており、并えているものなのであります。

しかし、人間の現実をみるならば、自からの決断により安定した場や時間から脱落し創造に於ける人間の自然から疎外されており、今や愛をもって相互に助け、助けられつつ関わる深い連帯に於て生きる共同の生の姿はなく、自己中心的利己的となり、愛に於てではなく、自己の利益に於て連らなり、相互に主観性により他者を統一しようとする利益共同

体的存在、ヘーゲルの言葉をかりれば「欲望の組織体」へと変容してしまいました。これは、ほかでもなく人間性の喪失であり、「人倫の喪失態」であります。そして、人間性の喪失は、「生きる者」から「土くれ」（創世記2・7）としての存在への脱落であります。

従って、そこに在る人間の生は、外見や表面はどうであれ本質的根本的に死に至る病を病める者、失せたる者であります。

また現成している安定の場や時間は喪失し、愛による相互連帯の共同の生がもつ自然的な自己肯定は破壊され、知・情・意の本来的な創造的役割を破壊的自己高揚の具となし、「己が腹を神とする」（ピリピ3・19）弁えなき者へと転落してしまったのです。

従って罪とは、創造に於ける人間の自然からの脱落であり、それえの反逆であり、現成した安定の場と時の喪失、人間性の喪失、実存からの疎外・神の国・神の支配からの脱落であると申せます。

五

人間の罪について考えるとき明確にしておかなくてはならぬことは、人間がもつ自然的な利己心、または自己中心性を即罪・即悪とみなし、他方そのような利己心・自己中心性を否定することを即善・即聖とみなす考え方は正しくないということであります。

創造に於ける人間の自然的生には一切の利己心・自己中心性といったことは全く見られず、只そこには人間相互のうるわしい共同体の現実のみが張っているということではありません。

イエスが志向された人間の実存共同体も、そのようなものではなかったのだと思います。従って、教会が目ざす人間の共同体もそのようなものだと思い込むことは観念的な信仰が生み出す幻想でしかありません。

人間には創造に於ける自然としての自然的自己肯定が知・情・意にあります。それ故にこそ知性は発達し、感性は深まり、意志は強くされるのです。そして人間の文化は創造され

て行くのです。

また、人間の自然的自己肯定は相互に他を意識せしめ、競争や協調、時として対立等へかりたてることにより人間を創造活動へと導き人間を人間へと成長せしめる役割をもっています。

したがって、このような人間の自然的自己肯定の現象それ自体を善・悪・罪・聖などと価値判断すべきでなく、むしろそのようにあることが創造に於ける人間の自然なのであり、大切なことは、その自然なる現実を正しく認識するということです。

故に自然的自己肯定から表出して来る知・情・意の働きそのものを罪として否定するようなことをしてはならないし、また他方に於て自然的自己肯定から表出して来る働きを何の反省もなく善きこととして肯定することもしてはなりません。なぜなら、それらは共に自然的自己肯定と、そこに現成する安定した場を一方は禁欲という人為によって、他方は奔放に捉進するという人為によって破壊してしまうからです。

これらについてはヨーロッパ中世に於けるスコラ哲学を基礎にした宗教的禁欲的な人

為の思想が人間性を抑圧し抱束し、人間として安定した場や時を喪失せしめ、一種の暗黒時代を招来せしめたことによって充分に理解できます。又他方に於て、人間の自然的自己肯定の表出としての知・情・意を奔放に捉進せしめることが善だとした人為が申すまでもなく近代ヨーロッパの合理主義であったのですが、その結果、自然的自己肯定とそこに現成する安定した場や時間は崩壊し危機的状況を今日提していることは既に私たちのよく見て知っているところです。

では、人間の自然的自己肯定と、そこに現成する安定した場や時間を崩壊し喪失せしめる人為とはどこから生じて来るのでしょうか。それは決して自己の外から働きかけて来るものではなく、人間の自然的自己肯定から表出して来るその働きとしての知・情・意のうちから生じて来るのです。正にイエスが「人を汚すものは口から入るものではなく、内から出るものである」（マタイ15・17～20）と申されましたが、人間は自己を自己自身によって破り汚すのです。

自己を自己自身によって破り、汚すとは、創造に於ける人間の自然を破り、汚すという

意味で、第一に創造の定めへの反逆であり、第二に自然性の破壊、つまり不自然であり、第三には安定した現成せる「場」又「時間」の喪失、つまり「不安定な場」又は「非創造的な時間」の出現であります。そしてこれからは現実的には、対神、対自己自身、対他人又対社会、更に対自然へ罪となって現れるのです。

人間の自然的自己肯定を推進して行くものが、自然的自己肯定から表出して来る働きとしての知・情・意でありますが、同時に人間の自然的自己肯定を歪め破壊する媒体的誘因になるのも知・情・意なのです。ここに人間の本質的な自己矛盾があります。（しかし、この矛盾を矛盾のままで統一せしめる要めとも言うべきものが、創造の定めを定めたらしめて自然としている根拠なのです）

パウロは、この人間存在の自己矛盾を「わたしは自分のしていることがわからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行はず、かえって自分の憎むことをしているからである……わたしの内にすなわち、わたしの肉のうちには善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている、なぜなら善をしょうとする意志は自分にあるが、それをする力がな

いからである。すなわち、わたしの欲している善はしないで欲していない悪は、これを行っている。もし欲していないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。そこで善をしょうと欲しているわたしに悪がはいりこんでいるという法則があることを見る。……わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。だれが、この死のからだからわたしを救ってくれるだろうか」（ローマ人への手紙7・5～24）と告白しています。

たしかに、わたしたちの内には自然的自己肯定という創造に於ける人間の自然即ちパウロが言う「わたしの欲している善」「わたしの心の法則」を破壊するすさまじい破壊的自己高揚としての「別な律法」「欲していない悪」があることを認めざるを得ません。

しかし、このような人間の本質的矛盾、つまり、自然的自己肯定から表出して来る働きとしての知・情・意が人間の安定せる場を現成せしめる働きと同時に、それを破壊する媒体的誘因になるということは、人間存在の本質的自由性によるのであります。即ち人間が

天国と地獄・栄光と堕落・神と動物という可能的無限性をおびている幅のある存在、神のかたちとしてつくられた存在としての創造に於ける人間の自然なのであります。

以上の結論として言えることは、人間が創造に於ける定めとしての自然的自己肯定を無限的可能性へ志向しつつ生きることは即罪とは言えないということです。むしろ、そのように生き得るということは人間の自由のしるしであり、神にかたどって造られた人間の特殊性であって、それ自体を悪だとか善だとかの価値を与えてはならないということです。さらに附け加えるならば、動物的な自己も神的な自己をも弁えていることは即罪ではありません。

しかるに、このような自己の存在の定めを弁えているにもかかわらず、自己を一方に偏して高揚したり限定したりすることによって他者をも統一し善・悪・罪の価値を設定することは、創造に於ける人間の定めとしての自然、自然的自己肯定即ち自己自身に対する否定反逆行為であり、安定した場の破壊であり、更に「ひとがみづから属するもの―神・世界・自己自身―からの疎外状態にあることとしての罪」という、テイリッヒの言いまわし

を用いるならば、ひとがおのづからそうあらしめられている様態からの疎外状態に自づからの人格的決断によって成った、こととしての罪であると申せます。

従って、パリサイ的律法主義の状態もザアカイ的なこの世に対する知恵ある経済万能主義の状態も、ヘロデ王の政治的権力主義の状態もすべて自づからの人格的決断によっておのづからそうあらしめられている様態からの疎外状態へ成ったという意味に於て等しく罪であります。

イエスは正に、彼らに共通する破壊的自己高揚の事実の中に人間に於ける根本的な罪をみておいでになったのだと思います。

六

イエスは、パリサイ人たちに「見えるというところに、あなたがたの罪がある」と申さ

れましたが、それはパリサイ人達の弁えなき自己高揚の在り方、即ち人間の破壊的自己高揚として表出して来る知・情・意の行使の在り方が、創造に於ける人間の自然を正しく弁えず、その無限的可能性のみ志向し高揚することにより生み出した人間の在り方を「神の律法」として固定化し、その固定化された律法遵守を自己の救済の確かさとして「見える」と確信したことの誤りを罪として指摘なされたのであります。

彼らの誤りは、創造に於ける人間の自然を自己が自己自身について理解し生み出した律法のうちに閉じ込めてしまったことにあります。それは他でもなく、自己の観念の中へ神と自己自身を閉じ込めてしまったということです。正に「神の義を弁えず、自分の義を立て」（ロマ10・3）て、それを神の義として一切を縛り、統一してしまったのです。この姿こそ人間の自己高揚の最高の姿であります。又、神からの決定的な疎外であり、人間性の喪失、本来的人間からの脱落、創造に於ける人間の自然性に於ける意志の自立性の欠如であると言えます。そして、近代に於ける人間の文化的配慮の一切は、この延長線上にあり、従って、その文化が、どれ程美しくあり、善であり、真実のように見えても、本質的

には肉に属するもの、創造に於ける人間の自然を喪失、即ち非創造的時間のうちに堕落しているという意味に於て、人間を窮極的には救い得ないものであります。

故に、イエスは人間の自然的自己肯定としての知・情・意それ自体を否定されたのではなく、神の定めとしての人間の自然についての弁えなき出発点の誤りを指摘されるのです。

七

創造に於ける人間の自然についての弁えなき自己高揚の在り方、即ち人間にゆるされた無限的可能性を志向する知・情・意の行使の仕方が、創造に於ける人間の自然を正しく弁えず、その可能的無限性への志向のみ高揚することによって生み出した人間の在り方を、「絶対的なもの」、「神のロゴス」とし、それに固着し、それを遵守することが、人間の唯一の救済への確かさとしたということは、他でもなく、近代に於ける人間の在り方であ、

ったのです。即ち物質信仰と進歩信仰による社会の発展・生産力の増大と民主主義および正義の実践が、人間の救済への確かさとされたわけです。

しかし、今日この救済への確信は、第一次、第二次世界大戦、ベトナム戦争、それに高度に発達した技術社会等々に於ける社会的人間的諸矛盾に遭遇するに及んで、崩壊しつつあります。それは、物質信仰・進歩信仰にもとづいて生み出された一切の措定を前提として、ものごとを精細に研究して行く学、又は態度に対する疑問となってあらわれ、いきおい近代に於ける人間についての考え方に根本的な不信を巻き起しています。

その意味で、あらゆる措定を前提として学問する態度を否定し〈事象そのものへ〉というテーゼをかかげ、すべての先入見を排出し判断停止を主張して「原初の知」即ち「自然的態度」にもどって、一切を判断し、究明すること！普遍をめざすには、学を個別学にする措定から脱出することを、うったえたフッサールの哲学、即ち現象学の態度が今一度みなほされ、その態度に直接間接に影響されているハイデッカーやサルトル、ヤスパース、メルロ・ポンティ等の実存哲学が生れ、流行するのもうなづけます。

これらは、単に現代批判に止まるのみでなく、深く人間自身への根本的反省として語られているのです。即ち、「人間とは何か」「人間の真の在り方、本来的な在り方とは何か」又「存在とは何か」という、極めて人間論、存在論としてとらえられ、問はれているのです。

イエスは、見えるようになるため盲目になれ、と言はれ、生きるために自己に死ね、という意味のことを語り、こころ豊かになるために、心貧しくなれ、更に、正しく律法を生かすために律法に死ねと言い、自から律法を否定されるような言動などは、一切の措定を前提として学問する態度を否定し〈事象そのものへ〉迫ろうとするフッサールの態度とあるところで共通するものがあります。

それは、とりもなおさず、イエスの生き方そのものが現代の人間の生き方に深い関わりをもっているものなのだということ、即ち現代とイエスの接点の一つは、ここなのだということであります。

一切の措定を前提として学問する態度を否定し〈事象そのもの〉に迫ろうとするフッサ

ールの態度は、人間の可能的無限性への志向のみ高揚することにより生み出した、人間の在り方についての一切の観念を否定し――「肉の思いをすてる」「心を貧しくする」「思いわづらうな」「己れの生命をすてる」―創造の自然または定め――「神の知恵」「霊の思い」「神の支配」「神の愛」「信仰」「摂理」―に眼ざめ至ろうとするイエスの態度の一つの哲学的追求であります。

「自己に死に、神に生きる」ことによって見得る創造に於ける人間の自然や世界の根抵、存在の奥義への招待の行為こそ、イエスが生涯をかけてなされた業であったと言えます。

そして、この存在の奥義について開眼せしめられることが、神への開眼であり、また神の像(かたち)としての人間の本来性への復帰、更に創造に於ける人間の自然の発見であります。

では一体、人間はどのようにして、自己の可能的無限性のみ志向する破壊的自己高揚から素直な自然的自己肯定へ復帰し得るのでしょうか。即ち人間の救済の方法はいかにして可能なのでしょうか。

八

すでに述べて来たごとく、人間を破壊的自己高揚へと導いて行くものは、人間自身が創造に於て生得している知・情・意であります。即ち知と情と意が、それ自身独立して、それ自身のもつ自己肯定の働きを高揚するとき、知は一切を対象化し分析し判断し、主観的に統一化し対象的知識として、精神としての自己の中に隷属化してしまい、そうすることにより存在する一切に対して自己を主人又は自己絶対化、神としてしまいます。知のこのような姿こそ近代理性または悟性にほかなりません。

このような「知」特にデカルトに於ける技術理性により一切を物として客観化する「知」により出された思想や科学が、人間の幸福を追求し実現せしめるものと信じられて来たにもかかわらず、その努力の結果は、かえって人間を混乱と不幸に追い込んでしまうことになったという事実は先にも述べたごとく近代から現代に至る人間の歴史を見れば一目瞭然であります。

さらに、情についてみれば、理性や悟性による分析、即ち心理学的反省の助けにより情動としての動物的欲望とされたり、きわめて主観的な気分、とりわけ、安ぽい西欧近代の意味するヒューマニティとしたり、情操としてさまざまの美意識として芸術や宗教を生み出しましたが、すべてそれらはエロース的（自己快楽的・自己目的的・人間中心主義的）となり、そこでは聖なるものはゆがめられ頽廃と堕落と混乱とを招来せしめる媒体的役割を時として大きくはたして来たと申せます。

そして意について言うならば、その働きはカントやゲーテの願いにもかかわらず自己中心的利己的且つ自己実現の意志的努力的な「行為的人間」のそれであり、他者への深い配慮は失はれ狂暴化し権力意志・盲目的意志の何ものでもなくなり、人間をして対立と混乱へ導く働きをして来たと言えます。

このように知・情・意は自己自身に対して、その無限的可能性のみを行使することにより結局破壊的な自己高揚の具となってしまいました。

この人間の現実は、も早やプラトンやアリストテレスの哲学で育てられて来た教会教父

たちの理性主義的人間理解―人間のもつ「神の像」を人間の理性と考え、その理性を行使するところに他の一切の被造物に対する優位として理性をそのまま人間の本質とする人間理解―とは隔絶するものであることは明らかです。

知・情・意は本来それ自身、自己の有限性をわきまえる「つつしみ」即ち、自己の有限性の認識を深く秘めているものであり、そこにこそ知・情・意の本来的な働きの特徴があるのです。

「理性の理性たるゆえんは、理性の限界を知っているところにある」とパスカルは言っていますが、正にこれこそ知・情・意の総体としての意識的存在である人間の特質であり「神の像」としての創造に於ける人間の自然なのであります。

その意味で、ラインホールド・ニーバがその人間論で、人間のもつ、「有限の自由」こそ「神の像」だと言っていることは正しいし、さらに、テイリッヒが「神律」のもとで「自律的」に生きる人間こそ、本来の人間の在り方としていることは、創造に於ける人間の自然について弁えある自然的自己肯定をなす人間の知・情・意の正しい行使の在り方を

言っている、という意味に於て正しいと申せます。

では、并えある自然的自己肯定の行使を、創造に於ける人間の自然へと導いて行くものは何なのでしょうか。

それは一口に言って、個人が神の愛に開眼せしめられるということであります。

以下、この観点に立って知・情・意について考えてみたいと思います。

九

自然的自己肯定としての知・情・意を考える場合、それをいきおいショペンハウエルの如き「盲目的な生への意志」又はニーチェの如く「権力への意志」としてトータルに理解されかねません。勿論そこには近代の合理主義思想と、その産物である機械的形式文化への反発として、自由なる生の展開を拘束しようとする固定観念の体系よりも自由な生の

流動にこそ具体的真理を見出し、より強力なる生命活動の創造をめざすことによって新しい価値定立への志向があることは、それなりに大いなる意義が認められます。

しかし、そこでは未だ純粋に創造に於ける人間の自然である自然的自己肯定としての知・情・意から逸脱して破壊的自己高揚へと堕落する要素をその内に秘めていると言わざるを得ません。なぜならば、自然的自己肯定としての強力なる生命活動の創造を志向する余り自然的自己肯定をそのようにあらしめている根拠である神に死の宣告を下し、代つて「超人」を要請することにより、結局は自然的自己肯定の安定性を崩壊してしまうことになりました。

たしかに、自然的自己肯定を破壊せしめる最大の要因として、当時の人間を「奴隷道徳」の中に閉じ込めていた絶対的価値基準としてのキリスト教会のドグマを打ち砕き、人間をその抱束から解放するために、その元凶である神に死の宣告をくだす必要はあったのですが、ニーチェの場合、当時のキリスト教会のドグマに閉じ込められた「神」を解放すべきところを、真実な神と教会のドグマの神との区別をすることなく、ないしは、教会のドグ

マの神に死の宣告を下だし、真実なる神を復興さすべきところを、ドグマの神と共に真実なる神にも死の宣告をくだすことによって、教会のドグマの神とその本質に於て等しい「超人」を産出せしめることによって、以前にもまして、人間の自然的自己肯定としての知・情・意を破壊的自己高揚のそれへ堕落せしめることになってしまいました。

勿論、「超人」を産出せしめることによって「すべての価値転換の試み」をなし、全く新しい価値原理を定立することにより、来るべきニヒリズムを克服せしめ、人間文化の創造性を勝ちとろとしたニーチェの時代と歴史に対する洞察力と努力は並のものでなかったことは事実であります。

しかし、既存の一切価値の転換の後創造さるべき価値定立の新原理を生の本質たる権力意志の増大、その体現者としての「超人」に求めることは創造に於ける人間の自然という意味で「あまりにも非人間的な、あまりにも非人間的な」ことであったと申さねばなりません。

彼は、教会のドグマの中にのみ生きる神に死の宣告を下し、代って人類の範型としての

超人を「イエス」その人の中に見い出すべきではなかったのではないかと思うのです。従って真の超人の生の本質は「権力への意志」ではなく、弱者たちのいだく卑劣な怨恨感情によって仮構された偽善の愛を超克したイエスの生きざまのうちにみる「愛への意志」でなければならなかったのだと思うのです。

とにかく、創造に於ける人間の自然なる自然的自己肯定としての知・情・意というものは、単なる盲目的意志・権力への意志の創造的発展をはかるための道具として用いられるのではなく、更にベルグソンに於けるような「生命への躍進力」といった生命の持続のうちに解消されるものでなく、どこまでも創造に於ける人間の自然に秘められた愛によって流出して来る自然的自己肯定としての知・情・意でなければなりません。そうでなければニーチェの真意をゆがめたドイツのナチズムが彼の権力思想を己れの残虐非人道的なイデオロギーの合理化の具とした如く悪用されかねませんし、悪用されること自体すでに、ニーチェの真意はどうであれ、その思想原理が破壊的な自己高揚性を秘めていたからだと言えないこともありません。

十

それにしても、ニーチェが従来の価値体系の指導原理としての神のロゴスである理性の崩壊すなわちニヒリズム到来を予言したことは正しく的中しましたし、その意味で私たちはニーチェと同じく、今日声を大にして、西洋の文化形式を支えて来た指導原理としての理性的法則、永遠の真理としての理性への死の宣告、即ちそれは神のロゴスに死の宣告をきっぱりとすべきであります。

そして、未来に対する人間文化の正しい創造原理としての「愛への意志」をもって、真実なる神のロゴスの再成をなすべきだと思います。それは、とりもなほさずイエスがその生きざまに於て示された、創造に於ける人間の自然への開眼による宗教復興であると言えます。

今日人類は、その生の新しい指導原理を求めて止みません。そのために偉大な思想家の出現も必要でありましょう。しかし、私たちは新しきを求めて待ち望むことよりも、すで

に、その偉大な方は到来していることに気づかねばなりません。

それはほかでもなくイエスその人であります。

私たちは今、このイエスをして愛への意志に生かしめ、イエス自から見て知っていたあの現実であるところの創造に於ける人間の自然とその根拠に開眼せしめられたいと切に願うものであります。